

特集 ■ 国際交流・協力

リハビリテーションにおいても他の分野と同様、国際協力は欠かせません。医療を考えることはそれを取り巻く社会を考えることになります。国際協力に興味のある読者へのガイドのみならず、わが国の医療・福祉システムを構築する際にも必要となる共通の視点や、当事者のエンパワーメント、プロジェクトの進め方について、各分野の国際協力の専門家にご解説いただきました。

リハビリテーション医学と国際交流 (志波直人氏, 599 頁)

IT が発達した現代にあっても、最も重要な情報は、積極的な国際交流のなかで生まれる直接的な対面によって得られるという考えに基づいて、日本リハビリテーション医学会では国際交流・支援活動を展開している。特に、学会員の海外研修助成および外国人リハビリテーション医師対象の短期交流助成（国内に受け入れ施設を募集）には、積極的な応募を呼びかけている。関連職種においても包括的な国際学会も増加しており、職種・国境を越えた交流が望まれる。

リハビリテーション技術と国際協力 (田口順子氏, 605 頁)

日本からのリハビリテーション関連援助の二本柱は国際協力機構（JICA）と NGO によるものであり、地域に根ざしたリハビリテーション（CBR）の視点が重要である。いまや、障害者に福祉サービスを提供するだけでなく、社会の一員として参画できるような計画も求められている。PT, OT, ST, PO など、それぞれの職種において国際協力の実績があり、今後は協会レベルでの参画が期待されている。

障害児教育と国際交流 (西牧謙吾氏ら, 613 頁)

今日の障害児教育は、インクルージョンを障害児教育の改革としてではなく、教育全体の改革としてとらえる 1994 年のサラマンカ宣言により、大きな変革を遂げつつある。日本における特別支援教育への移行もその一環であり、また、国際的には、治療教育的内容から、システム・アプローチと言われるスタッフや組織のあり方を議論するようになってきている。制度やインフラの違い、文化的背景に配慮したパートナーシップの形成が重要である。

障害者の自立と社会参加を支援する国際協力 (指田忠司氏, 619 頁)

障害者の自立と社会参加を考えるにあたり、人権保障、社会開発、コミュニティからの視点は欠かせない。支援する側がこのような広い視野をもち続けること、および当事者団体のエンパワーメントのために、さまざまな手法を利用した報告・研修会があり、各国の経験交流に役立てられている。

国際医療協力のための基礎知識 (建野正毅氏, 625 頁)

現代の開発援助は、1960 年代の経済成長重視、1970 年代の Basic Human Needs 戦略、1980 年代の構造調整改革、1990 年代の人間開発の提唱、2000 年以降の社会開発の主流化、という変遷を遂げてきた。今日、保健医療分野における協力では、医学的対策だけでは不十分であり、貧困削減やコミュニティ開発など、途上国の人々が健康な生活を送るための社会経済活動への支援（社会開発プロジェクト）が要求されている。JICA の国際協力の特色は、自助努力サポート、現地機能の強化であり、途上国の人々と共にプロジェクトを実施する協力スタイルをとっている。